十月興行より引續き壹ヶ月延長上演

霜月興行 人形浄瑠璃

（狂言一部変更）

区立博物

文楽座

健民運動
皆国
兵民

乍憚口上

錦秋の頃と相成り四方皆々様には愈々御麗はしく被遊恭悦申上候

偖而當座に於ては前月興行非常の御意に適ひ難有仕合せに奉存候　就ては當る霜月興行に於ては前月の延長と仕り狂言一部の變更を加え一層の努力を以て相勤め可申候間益々御引立に預り度特に此度は勝平改め二代目野澤喜左衛門　勝芳改め二代目野澤勝太郎　綱延改め四代目野澤錦糸以上三名白井松竹會長大谷社長白井副社長様の御推擧と先輩諸氏のお勸めに預り襲名の御披露を仕る事と相成申候まゝ此上は一層の舊勵を以て御贔屓様方の御恩顧に酬ふ可く候間何卒相變らず御聲援御指導の程偏へに御願申上度先は延長興行御挨拶旁々御願まで如斯に御座候

昭和十七年十一月一日

四ツ橋畔

文樂座　敬白

昭和十七年十一月一日初日

初日午後三時開演

毎日午後三時半開演

。御觀覽料。

一等席　御一名　金三圓五十錢（一階座席三十錢上り）

二等席　御一名　金一圓五十錢

三等席　御一名　金六十錢

各等入場税別

一等御座席（一等椅子席）は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符專用電話　南㊱四七壹壹番

一般御用の電話　南㊱三〇三二番　三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ゐます。

本誌へカット廣告御掲載希望の向は文樂座宣傳部へ願ひます

十月興行より引續き堂々延長上演

霜月興行人形淨瑠璃

（狂言一部變更）

太夫・三味線・人形總出演

十一月一日初日

初日午後三時開演
毎日午後三時半開演

第一　源平布引瀧
竹生島遊覽の段より實盛物語の段まで

第二　新作出陣幕
西川孝作作曲
食滿南北衣裳考案
楳茂都陸平振附
犬塚克三舞臺裝置

第三　壺坂觀音靈驗記
澤市内より壺坂寺の段まで

第四　本朝廿四孝
十種香より狐火の段まで

技藝奬勵

畫・間興行

（日曜・祭日）

（日）日五十・（日）日八
（祭）日三十・（日）日二十

（四日間に限り）

☆演終時三後午・演開時二十三時☆

第一　壺坂觀音靈驗記　澤市内の段　壺坂寺の段

第二　新作出陣一幕
西亭作詞作曲
食滿南作　梶度都陸平振附
北衣裳考案　大塚克三舞臺裝置

第三　本朝廿四孝　十種香の段　狐火の段

畫御	一等席　一圓五十錢
間觀	二等席　七十七錢
興覽	三等席　四十二錢
行料	

（各等税別）

一等席に限り五日前より前賣致します

技藝奬勵畫間興行（八日・十五日之部）

第一 壺坂觀音靈驗記

澤市内の段　竹本文太夫　鶴澤一郎右衛門

壺坂寺の段　座頭澤市　女房お里　觀世音　竹本隅若太夫　豐竹呂賀太夫　竹本南次太夫　豐野吉季夫　豐澤仙松

第二 新作出陣

竹本七齋　豐竹五島太夫　竹本津太夫　豐竹三宮太夫　豐野文太夫　鶴澤松太夫　鶴澤勝郎夫　豐澤友仙　鶴澤清作　豐澤團廣　鶴澤清友

第三 本朝廿四孝

十種香の段　竹本源太　鶴澤友花夫

狐火の段　豐澤越名太　ツレ琴　野澤錦伊三廣糸

【人形役割】

澤市内の段　女房お里　桐竹亀松　座頭澤市　吉田玉德

壺坂寺の段　女房お里　桐竹亀松　座頭澤市　吉田玉德　觀世音　桐竹紋之助

新作出陣　巴御前　吉田榮三郎　曾我仲義　吉田光之助　木村近師　吉田多三郎　法師兵　桐竹紋太郎　軍ぜい

十種香の段　娘八重垣姫　桐竹亀松　腰元濱衣　桐竹紋司　武田勝頼　桐竹紋太郎　長尾謙信　吉田多三郎　白須賀六郎　吉田兵次　原小文治　吉田藤一

狐火の段　娘八重垣姫　桐竹亀松

第一 壺坂觀音靈驗記

澤市内の段　竹本播路太夫　澤仙三郎

壺坂寺の段　豐竹司太夫　豐竹呂賀太夫　豐竹澤南次太夫　豐澤仙松郎

（座頭澤市女房お里　觀世音）

第二 新作出陣

竹本千駒太夫　竹本錦島太夫　豐竹源名太夫　豐竹越太夫　豐澤仙太夫　豐澤團三郎　豐澤清糸作　豐澤團伊廣作　豐鶴三郎

第三 本朝廿四孝

十種香の段　竹本文太夫　鶴澤叶太郎　豐竹宮太夫　豐澤清友作　豐鶴澤團太郎

狐火の段　ツレ琴　豐竹澤勝太郎

【人形役割】

澤市内の段

女房お里　桐竹亀松
座頭澤市　吉田玉德

壺坂寺の段

女房お里　桐竹亀松
座頭澤市　吉田玉德
觀世音　桐竹紋之助

新作出陣

巴御前　吉田榮三郎
木曾義仲　吉田光之助
法師　桐竹紋太郎
郎師　大竹紋太郎
黨　吉田多三郎
右近　吉田光之助
兵衛　吉田榮三郎

十種香の段

娘八重垣姫　吉田光之助
元濱衣　桐竹紋太郎
腰田勝頼　桐竹紋司
武田長尾謙信　吉田多三郎
白須賀六郎　吉田兵次
原小文治　吉田藤一

狐火の段

娘八重垣姫　吉田光之助

竹生島遊覽の段

實盛　竹本七五三太夫
小まん（竹本源太夫）
竹本文太夫
左衛門（竹本長尾太夫）
竹本伊勢太夫
忠太（竹本隅若太夫）
竹本松島太夫
宗盛（竹本豐竹）
竹本司太夫
鶴澤綱造

源平布引瀧

竹生島遊覽の段
瀨尾十郎詮議の段
齋藤實盛物語の段

「源平布引瀧」全五段、寛延二年（一七四〇九）十一月竹本座上演。作者は並木千柳（宗助・宗輔）三好松洛の合作。材を「平家物語」「源平盛衰記」中の清盛專横の事、義賢義平に討たる事、義仲出世の事、多田藏人行綱の事、關の小萬の事、清盛等平家一門布引に遊びし事、實盛が白髮を黑に染め赤地錦の直垂、萠黃威の鎧で出陣し手塚太郎金剛光盛に討たれた事からとつて趣向を立てたもので角書きに「待宵侍徒優美藏人」とある。全體の略筋は多田藏人行綱布引瀧に平重盛を射損じて放浪し、近江の百姓九郎助の聟となり養女小萬と契る。後折平と稱へて木曾義賢の奴となり其女待宵に思はれる。義賢清盛に壓迫され自刄するや藏人は其室葵御前を九郎助に托して駒王丸を生ます。駒王を召捕りに來た平家の侍齋藤

人形役割

齋藤別當實盛　吉田榮三
小まん　桐竹政龜
飛驒左衛門　吉田玉助
平宗盛　桐竹紋司
塩見忠太　吉田兵次
瀬尾十郎詮議の段　竹本源太夫
中　勝芳改め竹本文太夫
野澤勝太郎
綱延改め野澤錦糸
次　竹本大隅太夫
鶴澤清二郎

人形役割

齋藤別當實盛　吉田榮三
瀬尾十郎　吉田玉造
小まん　桐竹政龜

實盛の述懐と瀬尾十郎が小萬の實父たるの告白の場はその三段目の切に當る。(「實盛物語の段」或ひは「綿繰馬の段」)尙、續いて原作では行綱が三人上戸の一人藤作となつて鳥羽御殿へ入り込むと、妻の待宵も官女となつて入り込み、我が君を救ひ參らせんとするといふ場面であるが、この四段目は今日に見る樣に改作增補されて、行綱は松並檢校となつて入込み、三人上戸の中、怒り上戸を平家の侍難波六郎とし、待宵の代りに娘小櫻を出してその折檻から松並の見顯しになると云ふ筋立てに變へられ、「松並檢校琵琶の段」と呼ばれる樣になつてゐる。

梗概

琵琶湖、竹生島に遊んだ平宗盛の一行が勢田唐崎邊りへかゝつた船上だつた。矢橋の方から廿才餘りの女が口に白絹を咥へて、拔手を切つて泳いで來た。そして其の船に助けられた。救はれたのが平家の船とも知らず。それは、平家方に追はれてゐる源氏方の女、小萬だつた。

折柄、御供として同船にあつた齋藤實盛は、女

女房小よし　吉田小兵吉
百姓九郎助　桐竹門造
葵御前　桐竹龜松
矢橋仁惣太　吉田玉德
悴太郎吉　桐竹紋之助
庄屋　吉田兵次
百姓　大ぜい

齋藤實盛物語の段

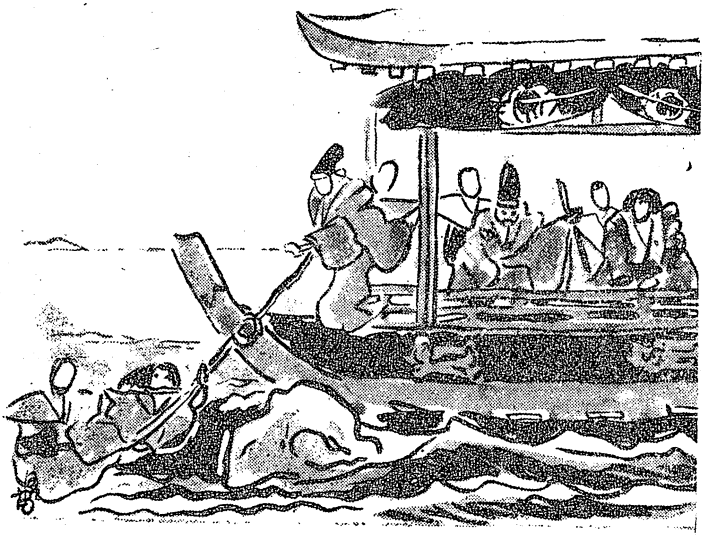
切　豊竹古靱太夫
鶴澤清六

人形役割

齋藤別當實盛　吉田榮三
女房小よし　吉田小兵吉
葵御前　桐竹龜松
瀬尾十郎　吉田玉造
矢橋仁惣太　吉田玉德
悴太郎吉　桐竹紋之助
百姓九郎助　桐竹門造

が持つ白絹が源氏の白旗だと見てとるや、矢庭に大刀を拔き放つて女の腕を切り落した。白旗を堅く摑んだ片腕と、その死骸は其のまゝ何處かへ流れ去つた！——。

こゝは琵琶湖近くの百姓九郎助の家である。九郎助は木曾義賢の妻葵御前を我家へ匿つてゐたが其日、孫の太郎吉に誘はれて網打ちに行き、白絹持つた女の片腕が掛つたので持つて來た。誰れがもがふとしても離れなかつたその白絹が、太郎吉の手に難なく離れた。よく見れば源氏の白旗ではないか。葵御前始め皆々驚くばかりであつた。其時、九郎助の甥矢橋の仁惣太の訴人により、平家の侍瀬尾十郎、齋藤實盛の兩人が、源氏にゆかりの者は胎内まで探せと云ふ清盛の命令だと出產の日を待つ葵御前を召捕りに來る。九郎助の妻小よしは、先刻の腕を葵御前が產み落したと持つて出る。實盛は支那の故事を引いて腕を產まぬもので



もないと瀬尾十郎をなだめて葵御前を救ふ。實盛はもと源氏の侍だつたのである。瀬尾は思ふ所あるのか澁々戸外に出て藪陰へ身を忍ばせた。

實盛はその女の片腕を見て思ひ當つた。そして竹生島詣の折、船中より腕を切つて白旗を水に沈めた仔細を涙乍らに物語つた。太郎吉は突然母の仇と實盛を睨む。其處へ村人が小萬の死骸を昇いで來た。實盛が片腕を胴に接ぐと不思議や小まんは息吹き返へし太郎吉を抱いた。そして其まゝ全く絶命した。九郎助は、小まんは實は拾ひ子であつたと告白した。折も折、葵御前は男子を生み落した。實盛は名付親となつて駒若丸と呼ばせた。九郎助は孫の太郎吉を駒若丸の家臣にと望んだが葵御前は何か一つの功を立てねばと云つた。その時瀬尾十郎が躍り出て、故意と太郎吉の手にかゝる。そして自分こそ小萬の父親である事を明して孫の太郎吉の出世の爲めと死んでゆく。

太郎吉は平家の大將を打取つたと云ふ手柄で家

臣に取立てられた。實盛は綿繰馬に打ち跨つた太郎吉に向ひ、やがて母の仇として討たれよう、場所は北國篠原、それを樂しみに成人せよと云ふ。太郎吉は勇み立つた。

斯くて木曾家の血統も實盛の情によつて一脈を保ち、駒若丸は後に木曾義仲となり、太郎吉は木曾義仲の四天王、手塚太郎光盛となつて、齋藤別當實盛の墨染の首を討ち取る……。

（床本）　齋藤實盛物語の段（切）

出して走り行く。音頼れば葵御前、太郎吉連れて立出で給ひ、聞き及びし實盛殿、お目に掛るは初て、段々のお情、忘れ置じと有ければ、是は／＼御挨拶、某共は源氏の家臣、新院の御謀叛より思はずも平家に從ひ、清盛の祿を喰むといへども、舊恩は忘れず今日の役目乞受たも危を救はんため、然るに不思議なは此腕、矢橋の船中にて某が切落した覺有慥に此手に白旗を持ちつらん、御存じなきやと尋れば成程／＼其旗も手に入しが、其切たと有者の年恰好は、ホウ、年比は二十三四、背高く色白なる女、慥に名は小まんと聞より九郎助夫婦共、のふそれはわしが娘の小まんぢや、まんぢやとうろたえ歎けば御臺も俱に、扨こそそれよと骨身に答へ太郎吉は只うろ／＼と譯も涙に暮ゐたる。九郎助は老の一徹、息も涙もせぐりかけ、コレ實盛殿、娘が腕は何科あつて切つたぞ、むごたらしい事しやつた喃、この娘には六十に餘る親も有、七ツになる子も有ぞや、よもや盗も衒もせまい、何誤りで何科で、サアそれ聞ふ／＼とせちがひかゝれば女房も、そふぢや／＼親父殿、骸は何處に捨て有次手にそれも聞て下され、ム、夫も、今比は犬の餌食、當座に死だか生れて居るか、サア有樣にいへ。いはぬか情ぢやいふて下きれと夫婦が泣き出す心根を思ひ當つて實盛、扨は其方達が娘よな、聞も及ばん宗盛公、竹生島詣下向の御船、勢田、唐崎の方へ漕ぎ出す所に、矢橋の方より二十餘りの女、口に白絹を引くはえ、ぬき手を切てさつ／＼と、浮つ沈みつ泳ぎ來る、アレ助よ、アレ殺すなと、舷叩いてあせれ共、折柄比叡の山颪、柴舟の助もなく水に溺れる不憫さに三間櫂を投込で、念なふ御船へ助乘せ如何なるものぞと尋る内、追手と見えて聲々に、其女こそ源氏

義藤愛妻盗物語のぐん
此処 樽下
豊竹古勝太夫
相勤申候
模

方、白旗隠し持たるぞやそれ奪取れ、ばい取と呼はる聲を聞しより、船に居合す飛彈右衛門飛びかゝつてもぎ取らん、イヤ渡さじと女の一念、若しや白旗平家へ渡らば末代まで源氏は埋木、女が命にかえられずと、白旗持たる腕をば海へぎんぶと切落し水底へ沈しと、船を汀へこぎ戻し骸は陸へ上置しが廻り廻て此内へ白旗もろ共歸りしは、親を慕ひ子を慕ひ流れ寄つたか不便やと、涙交りの物語。聞程悲しく夫婦はせき上げ、道理で孫が目に懸り取つてくれいとわんばくも、虫が知らした親子の縁、三人かゝつて放さぬ白旗、心よう放したは、我子に手柄させたさか死でもそれ程可愛いか、手にとゞまつた一念が物いふ事はならぬかと、御臺もろ共取すがり、泣より外の事ぞなき、涙おさへて太郎吉はずつと立てヤイ侍ようかゝ様をころしたなと、ぐつと睨たる恨の眼、自然と實盛肝にこたへ、ホウ健氣なり達しや母が崖はソリヤそこにと、いふにかけ寄腕を抱き此手をば骸へ接で下されと、あなたへ持行きこなたへ頼み身を投げ伏て泣しづむかゝる歎の折も折、所のもの共死骸を持込み、コレ〳〵是の娘が切られて居た、腕がかたし紛失した、外はまんぞく渡しますと云ひ捨てゝぞ立歸る。ヤレ太郎吉よはゝが顔是が見納め見て置けといふにかけ寄りいだきつき、コレ喃はゝ様拜みます、無理もいふまいいふ事聞ふ物いふて下され、祖父様詫言して下されと、泣こがるればヤレ詫言に及ぶか、こつちよりあつちから、物言ひたうて成るまいけれど此世の縁が切てはな互に詞はかはされぬ死骸の有所をどうぞまあ尋ねふかと思ふたれど、なまなかに持て戻り顔見せたらたまるまいと、そちがねる迄待つて居た、ヘエ男勝りな女であつたが、夫が却つて身の仇と成つて死るか可愛やと、悔み涙に女房も嘸死しなにこなたやおれにいひ度い事が有つたで有ふ、太郎吉よ水汲んで樒の花で手向てくれ、イヤ〳〵おりやいやぢや、かゝ様が物言はにや聞かぬ〳〵とわんばくも夫計りが道理ぢやと、思ひやる程いぢらしゝ、實盛始終手を拱き、人々の愁歎に涙と浮む一工夫、思ひついて傍に立寄斯く甲斐々々しき女聲片腕切たり迚、即座に息も絶えまじきが、白旗を渡さじと一心腕に凝りかたまり五臓に殘る魂なし、再び腕を接ぎ合さば靈魂歸り息する事もあらん、誠に彼眉間尺が首三日三夜煮られても凝たる一念恨を報

ぜし例もあり、今この腕に溫り有もふしぎ、又は御旗の威德もと、切たる腕に白旗持たせ、物は試と接ぎ合せば我子を慕ふ魂魄も、御旗の德にや立歸り、息吹き返し目を開き、太郎吉何處にぞ、太郎吉といふに、悶り、ヤレ蘇生たわ爰に居る爰に爰にと取り縋る、ナウ御臺樣白旗はお手に入づたか、太郎吉にたつた一言いひたい事がと計にて今ぞあえなくなりにけり。ヤアコリヤ小まんやい小まん、小まんやい、ハア可愛やな、モウそれが遺言かいひたい事とはム、合點ぢや〳〵そちが筋目の事である何を隱しませうぞ此者は二人が中の娘でもござりませぬ堅田の浦に捨てござりました、コレ御覽じて下さりませこの懷に持つて居ります用心合口、金剛といふ銘を刻りつけ、氏は平家某が娘と書付も御座りますれば、もし親達が尋ねてこふか、取返しにもこふか夫ばつかりを案じてゐて今死なうとは存じませなんだ、生き返つたが猶思ひ、あんまりこれはどうよくな、ほいない別れと取付いて、わつと計りに泣き居たる、俱に悲しむ葬御前只ならぬ身にせきのぼす五臟の苦しみ、御產の惱み實嗟驚き、ヤアこりや夫婦の者泣いて居る所でなし御臺は產の惱みありいたはり申せと一間へ伴ふ間もなく用意の屏風引廻しお腰抱やら早目やら祖父祖母が介抱に心利いたる實盛が彼の白旗を押し立れば實に源氏を守の印、若君安々御誕生、初聲高く上げ給ふ、父義賢の稚名を直に用ひて駒王丸、後に木曾義仲と名乘り給ひし大將は、この若君の事なりし、九郎助歎も打忘れ、お生れなされたいと樣の御家來にはこの太郎吉、ムゝそれ〳〵かゝる目出たい折成ば實盛樣御執成と願へば點き、ホウ幸に死たる女の忠義を思へば骸は灰になる共一心の凝りかたまりし腕、うかつには燒き捨て難し、其手を直に塚に築き太郎吉が名を今日より手塚の太郎光盛と名乘らせ、御誕生の若君木曾殿へ御奉公、則是が片腕の、よい御家來と披露する。御臺は氣色を改め給ひ、尤も父は源氏なれ共、母は平家何某が娘と、九郎助の物語り一家一門廣い平家、若清盛が落し子も知れず、先ず成人して一つの功を立た上でと仰に實盛ハハア御尤至極、先づ此所に御座有て若君御誕生と聞えては一大事、義賢の御生國、信州諏訪へ立ち越御家來權ノ頭兼任に預け御成人の後再び義兵を擧げ給へ九郎助夫婦御供とすゝめに任する表の方、いつの間にか

は瀬尾の十郎小柴垣より顯はれ出で、ヤアそりやならぬ〳〵、斯くあらんと思ひし故死骸を持せて窺ひ聞義賢が悴、男子とあれば見遁しならず、いで請取らんと駈け入れば實盛頓て立ちふさがり、ア、これ貴殿も生通しに生きもせまい海とも山共しれぬ水子見逃しやるが武士の情、ヤアいふな實盛、扨は汝二心な平家の祿を喰ふて源氏の胤を見逃す不忠、ぐつとでもいふて見よ、じたい此のくたばつた女めが、白旗奪ひ取つたる故平家方は夜が寢られず、思へば〳〵重罪人めと死骸を立蹴にはつたと蹴飛ばし、サア生れたがき奴渡せ異議に及ぶと撫切と飛んでかゝるを太郎吉が、母の讓りの九寸五分、抜くより早く瀬尾が脇腹ぐつと突たる小腕の力、これはと人々驚く中、ようかゝ樣の死骸をば踏だな蹴たなと、えぐりくる〳〵流石の瀬尾急所の痛手にどつかと伏す、ヤレ出かしやつた〳〵と讃そやしても夫婦共、跡の難儀を思ひやり胸讃かす計なり。暫くあつて瀬尾十郎、何と葬御前是で太郎吉は駒王殿の御家來に成ふがヤ、平家譜代の侍瀬尾の十郎兼氏を討留た一つの功、成人を待ず共召遣はれて下さりませ、誠に思へば一昔、部屋住の折から手廻りの女に懐胎させ、堅田の浦へ捨たる平家の何某は某、又廻り逢ふ印に相添え置たるこの劍、廻り〳〵て我體、肋をかけて金剌と、成たも孫めが不便さ故、初めて御家來に、平家の緣と嫌はれては娘が未來の迷ひといひ、一生埋れる土百姓、七つの年から奉公せば、木曾の御内に一といふて二のなき家來取なし賴む實盛殿、サア瀬尾が首取つて初奉公の手柄にせよと、非道に根强き侍も孫に心も亂れ燒、するりと拔いて我首へしつかと當て兩手を掛、えい〳〵〳〵と引落す、難波瀬の尾と平家でも悪に名高き其一人最後は遺健氣なり。夫婦も泣なく其首を太郎吉持せ、御目見え葬御前は若君抱初めての見參に平家に名高き侍を討取つたる高名、主從三世の奇緣ぞと、仰を聞より太郎はつゝ立、サア是からはおれは侍、侍ならばかゝ樣の敵實盛やらぬと詰かけたり、ホヲ、遲々さりながら四十に近き某が稚き汝に討れなば情と知て手柄になるまい、若君と諸共に信濃の國諏訪へ立越、成人して義兵を擧よ、其時實盛討手を乞請、古郷へ歸る錦の袖ひるがえして討死せん、先それ迄はさらば〳〵いづれもさらば家來共乘がえ引けと呼はれば、はつと答へて月ひたへ

栗毛の駒を引出す、手綱追取乘る中に何國に隱れ居たりけん矢橋の仁惣太踊り出、ヤア先達て注進の褒美を無にしたそのかはり、實盛が二心で駒王丸を北國へ下す段々直に注進詞番ふた爭ふなと、云ひ捨てゝ馳け出す、實盛すかさず馬上より、用意の鉤縄打かくれば首にかゝつてきり〳〵〳〵引寄せ、引上引摑み、適儕は日本一の大欲無道の曲者めと鞍の前輪に押付て首かき切つて捨てけり其後手塚の太郎母が筐の小相口金剌取つて腰にぼつ込み綿繰馬にひらりと乘、ヤア〳〵實盛かゝ樣殺して逃るかいぬか、もふおれが名は手塚の太郎、コリヤこの金剌の光盛なり去ずと爰で勝負々々と呼はつたり、オヽ出かいた〳〵、蛇は一寸にして其氣を得る自然と備はる軍の廣言、成人して母の仇、顏見覺えて恨を晴らせ、イヤ〳〵申孫めが大きう成る中には其許樣は顏に皺、髮は白髮で其顏皺ろ、ムヽ成程其時こそ鬢髮墨に染め若やいで勝負を遂げん、坂東聲の首取らば池の溜りで洗ふて見よ、軍の場所は北國篠原、加賀の國にて見參々々、實に其時に此若が恩を思ふて討すまい、生き永らへて居つたらば、この親父めが御旗持兵糧焚くは私が役、首切役は此の手塚、ホウ、ムヽヽヽ互に馬上でむんずと組み、兩馬が間に落る共、老武者の悲しさは軍に仕つかれ風にちゞめる古木の力もおれん、其時手塚合點々々終に首をもかき落され篠原の土となる共名は北國の街に上ん、さらば〳〵と引別れ歸るや駒の梁手綱、隱なかりし弓取りの、名は末代に有明の月洩る家を跡になし駒を早めて立歸る。

附振平陸都蔦楳　曲作詞作亭西

置装台舞三克塚大　案考裳衣北南滿食

新作　出陣

一幕二場

人形後割

作者の言葉

この作は、暴戾なる平家追討の令旨を受けたる源義仲の出陣に取材、配するに、勇にして美なる巴御前の奮戰を潤色せしものであります。前段を能舞臺とし、巴の切なる旨を容れて出陣を赦す義仲が、首途に當り、ともゝ〳〵天地神祇に征戰完遂の祈願をなす一條を第一景に置き、後半は、木曾軍が必勝の信念の下、礪波に倶利迦羅等に、寡兵よく大軍を破りたる合戰の模樣を、巴御前によりて、物語り的に、或は寫實的に、秋の高原の舞臺面を背景として夢幻的化した、一小史傳の所作物であります。

これを作する當初、作者として意圖する所は、勿論、演劇としての興味を失せぬ事はさる事ですが、現下非常時局と併行して進む、實質的なものを欲したのでした。大敵と言へど恐れぬ必勝の信念、敬神祖宗の古來の美德、また、勇なる中に、情に篤き皇軍の武士道精神、そう言つた精神を、觀客と共々に、不意識の中に、昂揚する、視る目に、聽く耳に、優美にして、且、緊身的なあるものを望んだのでした。が、扨、上演にあたり、自分の意慾の一端も盛る事の出來ない、餘りにも無學無才、無能を歎ぜずには居られませんでした。實に、汗額赤面の至りです。乞ひ願はくば、默作愚曲にあきたらず、名作名曲を寄せられて健全なる作品を以つて、益々、斯道の開拓作興に資せられん事を痛切にお願ひする次第であります。

洛東愚庵にて　西亭述

（床本）出陣

今ぞ秋得し出陣の、今ぞ秋得し出陣の、壽永の秋の嬉しさよ。されば保元も夢の跡、雨露に幾年木曾木立、今日ぞ錦の晴衣、これは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さても平家の一族、月に浮かれ花に戯れ、奢侈專横に四海亂れ、我意暴戾に宸襟を御惱し奉る事、沙汰の限りにあるべき所畏くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候、さらば疾く出陣致して、叡慮を安んじ奉らばやと存じ候。

如何に義仲が郎黨やある、まかり御前に候。一議もあるべき候程に、巴にこれへと申し候へ。仰せかしこまつて候。如何に巴殿御大將の御召し候、とく是へ御參り候へ。木曾山おろし烈しくて、木曾山颯烈しくて秋の野分の身にしむも、君が惠みの溫かき、猛き勇婦も情けには なびく心の糸すゝき、招く尾花に誘はれて、御前に木曾の女郎花。御召しによりて侍り候。これは巴候か、おことに申すことこそ候へ、我れこの度令旨を賜り候上は、急ぎ出陣あるべく候、生死不明は戰場の常、さる間おことには、幼時の一子義高を育て、後日の備へ怠りなく、留守居嚴しく相守り候べし。仰せかしこみ候へども、それは情けなき御事にて候、義高君の御事、妹山吹に頼み置き候上は、夢氣づかひ候はず、この度の御儀、一期の大事、なか〳〵の御事ならず、一手一指もあだならざるの御時也。たとへ女の身なるとも、軍に立つは君への忠、武門の譽れ、國を鎭めの御戰に男女の候べき、それ日の本の女性として、申すも畏き御極み、そもその往昔や神后の后、妙なる御身に御劍を佩き、異夷鎭めの御舟出爲き英姿に敵もなし、誰れかおそれかしこまざらん、ましてや賤の、み民草心一すじ苧環のつながる糸のおみなえし、身は君恩に捨小舟、命は義による理りぞ、我が日の本の敎へなれ是非に馬側の御供に、侍らせ給ひ候へかし實に理りの事にて候、さらば山吹御前に後事を託し、出陣の供許すべし。こは有難き御言葉、過分の譽れ、この上や候べき。さらば先づ門出に八百武神に祈誓をなし、逆徒鎭護の御拜せん。實に〳〵それよ傳え聞く、人皇五十有一代時の帝の綸旨を受け、かの古への田村麿、東夷鈴鹿の惡鬼惡鬼、討鎭めんと御門出に、觀音薩埵を祈らせて、普天の下卒土の中、いづく皇土にあらざるや、皇

威に背く逆徒ばら、鎭め給へと祈願ある。軍を進めて東國や、轉々伊勢路の惡鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中、無二無三に割つて入り、八面六皮の勢に、惡鬼忽ち亡びけり。人間業にあらざりし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の軍神、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞかしこけれ、御加護の程ぞ尊けれ。いざ〳〵敬智に我れもまた、尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に、祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。それ天地の開けしより、國常立の御尊立たせ給ひて天ツ神、七代の後の大神、申すもおそれ天照、惠みも高き日の本の、國は千代までゆるぎなき、惡鬼惡靈、異夷原、鎭護退散、四海波靜かに、神の御聲振る、實に神さぶる神樂舞、實に神さぶる神樂舞。

巴は仰せ蒙りて、巴は仰せ蒙りて、はや出陣の晴れ戰さ、去る程に、扨も其後義仲公信濃を出でさせ給ひしは秋も仲空穗すゝきの、なびく勢ひの二萬餘騎、義を泰山の兵等、轡並べて攻め上る、其の時平家の軍陣は、曾子維盛惣大將、それに隨ふ十餘萬、たとへ幾百千萬とて、枯野の芒にことならず、何條恐れ申さんや、我れに正しき士道あり。義を一元の合戰に、神も力を添へぬべし、戰は我れに勝鬨の、えい〳〵應の陣聲は、礪波の山にこたまして、木曾に名を得し四天王、一騎當千の勢は、秋のすゝきを薙ぐがごと、すさまじきともすさまじき、さて倶利伽羅の火牛の計、谷へおちこち敵の軍、哀れ木の葉の木曾嵐、我れも初陣と木曾駒の、白毛のひづめ、かつ〳〵〳〵、是は木曾にて女武者、巴が晴れの出陣なり君の御爲に散る命、何惜しからめ紅葉ばの、手折れや討てや人々よ、聲によせ來る諸軍勢、もとより好む長刀を柄長にしつかと追とりのべ、右よ左りよ前後、二つ巴や三つ巴、まんじ巴と戰ひける、一息ふつとつく鐘の、折りしも壽永秋の暮れ、桔梗かるかや女郎花、千草にすだく虫の音の、りん〳〵きり〳〵、松虫きゞす、聲は夜風に冥々たり、亡き兵を弔ひの我が武士道の情けには、敵も味方もおしなべて、松の惠みの下雫、松の惠みの下雫、皇が御德のうるほふまで、いざ〳〵征かん、いざ征かん勝つて兜の緒をしめて、勝つて兜の緒をしめて。

壺坂觀音靈驗記

澤市内より壺坂寺の段まで

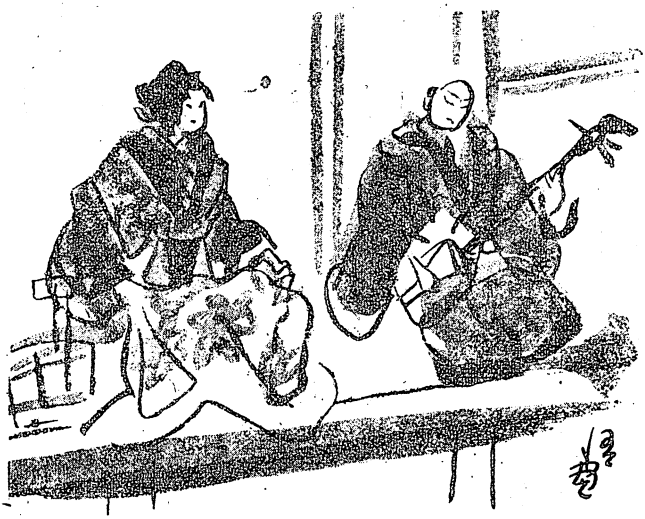
澤市内より壺坂寺の段まで

竹本　伊達太夫
勝平改め野澤　喜左衛門
（鶴澤友造）
（豊澤猿二郎）
（竹澤團作）
（鶴澤清廣）

人形役割

女房お里　吉田文五郎
座頭澤市　吉田玉助
觀世音　桐竹紋十郎

この「壺坂」は「良辨杉」等と同じく、名人豊澤團平とその妻加古千賀との夫婦の協力によつて生れた明治時代の新作淨瑠璃中、最も人口に膾炙した曲である。元來この「壺坂」は「西國卅三所觀音靈場記」と呼ぶ各寺一段の形式をもつ作者不詳の合作物の中の一段の中に當るもので、恐らく西國第六番の札所大和壺坂寺に流布してゐる緣起に加筆した程度のものが臺本となつてゐたらしく、それを更に千賀女が補筆改作して成つたものが現在の「壺坂」で、作品として構成は至極單純。これに夫の團平が節付けして始めて「壺坂」、正しくは「卅三所花の山壺坂靈驗記」が生れた。但し團平の節付けも今日の「壺坂」に大成するまでには前後二段の改訂を經てゐた最初、千賀女の加筆した「壺坂」に節付けしたものを床にかけたのは島太夫で、明治十二年十月大阪大江橋の席であつた。それを受けて二度目に名人住太夫（越太夫時



代）が語つたが、一時中絶した。後、三代目大隅太夫が更にそれを傳承して、明治廿年二月十日から稻荷の彦六座で團平自らの糸で語ることになつたが、この時團平は前の節付けを全然改めて今の樣なグツと派手で流麗巧緻なものにしてしまつた。斯うして俄然人氣に投じ、流行を極はめ、一般化されて今日に至つた。

梗概

大和國壺坂寺の片邊りに澤市と云ふ座頭が住んで居た。女房のお里は座頭の妻には惜しい程美しいと云つて近所でも評判だつた、それが盲目の澤市には秘かにねたましかつた。それにお里と夫婦になつて丸三年、毎夜七ツの鐘が鳴るとそつと家を抜け出して行くお里が不審でならなかつた。誰かお里が思ひを通はす男があるに相違ないと澤市は思つてゐた。然し、盲目の自分の身を考へるとき、僻みさへ加はつて、いつそ默つて居やうとも考へた。

とある夕方である。澤市はいら〳〵する胸をし

づめて、遣る瀬ない三味線を彈いてゐた。
「鳥のこゑ、鐘の音さへ身にしみて思ひ出す程なみだが先へ落ちて流るゝ妹脊の川を……」
澤市は自分でこの唄がかなしかつた。
めづらしく三味線なぞを彈いてゐる夫の姿がお里には機嫌よく見えなくもなかつた。お里がそんなことを云ひ出すのが澤市は心外だつた。いつそのことお里に云つてしまはう。澤市はさう決心した。そして今迄不審に思つて居た事などを怒りの聲さへ交へて語つたのだつた。
それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたとは云ひ乍ら、夫の言ひ分が自分の心に引き較べてあんまりなのに泣きくづれた。
譯はかうだつた。澤市とお里は從兄妹同志一緒に育てられた仲だつた。その中に澤市は疱瘡にかゝつて眼までつぶれてしまつた。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働いた。そして澤市の眼病平癒のため、この三年の間と云ふもの雨の夜も雪の夜も壺坂の觀音へ跣足詣りをつゞけて居たのだつた。
それと解つてみると、澤市は貞節な妻の前に自分がならべた邪推がはづかしかつた。そしてお里に泣いて詫びるのだつた。
すべてを打開けたお里は、澤市の心を引立てゝ一緒に觀音へ參詣してみたら、とも云つた。腑甲斐ない自分をさうまで云つて呉れる女房に對しても、眼が開くものなら開きたいと澤市は思はないでは居られなかつた。
何時の間にか夜になつた。お里に手を取られた澤市は、險しい坂道をやつとのことで壺坂の觀音堂まで辿りついた。二人はつゝましやかに西國六番の札所此處壺坂觀音の御寺に額づいて御詠歌を上げた。
この眼が癒るものか、癒らぬものか三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里をその仕度に家へ歸してしまつた。然し澤市はもう決心して居た

のだ。あの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても所詮は治ることのない業病、いつそひと思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのである。

杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市だつた。

一人殘して來た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつてみると夫の姿は見えない。呼べど叫けべど松風と谷の音ばかり。お里は狂氣の樣に澤市の行方を尋ねた。ふと見ると崖の上につき立てた見覺えのある夫の杖、はるか谷底を見やれば、さす月光にあり〳〵と澤市の姿さへ見えるのだ。夫澤市を失つてお里はどうして生きて居る甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて谷間へ身を投げたのであつた。

やがて夜が明けかゝる頃、谷間に横はつた澤市お里の死骸には夜明けの風がつめたくあたつた。

何處からともなくかほる靈香、妙なる音樂につれ、あり〳〵と姿を現じ給ふたのは壺坂の觀世音だつた。

觀世音は澤市、澤市、お里、お里と二人を呼びさますのだ。二人は眠りから覺めた樣に眼を開いた。お里の貞心に佛も感じ、二人の命を救つたのである。さう云へば澤市の眼も開いて居た。觀世音は、三十三ヶ所の靈場を巡禮して佛恩に報ひよと云ひ殘して姿を消してしまつた。

二人の喜びは何にたとへ樣も無かつた。たゞ相抱いて躍り狂ふ二人だつた。

床本抄

夢が浮世かうき世がゆめか、夢てふ里に住みながら、住めば住むなる世の中に、よしあしびきの大和路や壺坂の片邊り土佐町に、澤市といふ座頭あり。生れ付いたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身代の、薄き煙の營みに、妻のお里は健かに、夫の手助け賃仕事、つづれさせてふ洗濯や、糊かいものを打盤の、音も幽のくらしなり。

もとゝ樣や、かゝ樣に別れてから伯父樣のお世話になりお前と一所に育てられ、三つちがひの兄さんといふて暮してゐる內に、惰なやこな樣は、生れも付かぬ疱瘡で、目かいの見えぬその上に、貧苦にせまれど何のその、一旦殿御の澤市樣、たとへ火の中水の底、未來迄も夫婦ぢやと、思ふばかりかコレ申し、お前のお目を治さんと、此壼坂の觀音樣へ、明の七つに鐘を聞き、そつと拔出で只一人、山路いとはず三年越、せつなる願ひに御利生のないとはいかなる報ひぞや、觀音樣も聞へぬと、今も今迚恨んで居た、わしが心も知らずして、外に男がある樣に、今のお前の一言が、私は腹が立つわいのと、くどき立てたる貞節の、涙の色ぞ誠なり。

ほんに思へば此身程はかない物が有ろかいな、二世と契りし我夫に長い別れとなる事は、神ならぬ身の淺ましや、かゝる憂目は前の世の、報ひか罪かエ、情けなや、此世も見えぬ盲目の闇より闇の死出の旅、誰が手引を仕てくれふ、迷はしやるのを見る樣でいとしいわいのとかきくどき、くどき立て〳〵歎く涙は、壼坂の谷間の水や增るらん。

ハ、ハ、ア有難や忝なや、是より直にお禮參りは浮木の龜、始めて拜む日の光は、年立ちかへる心地ぞや、是ぞ誠に觀音の、御利生有りけるや、見えぬ眼も見え明らかに、有難かりける新玉の、年立ち歸る如くにて、水も洩らさぬ夫婦の命も助かりけるは、誠に目出度うさふらひける。けふは嬉しや杖を納めて折しも朝の、日の目を拜んで、お禮申すや神や佛萬見せ給ふは是偏へに觀世音これ偏に觀世音の、誓も重きは岩を建て、水をたゝへて壼坂の庭の、いさども淨土なるらん御示、有難かりける御法なり。

勝平改め　二代野澤喜左衛門略歷

明治廿四年六月廿七日神戸市楠町に生る。本名加藤善一。三代野澤勝市師（後の初代野澤喜左衛門）に就き八才より太夫としての敎へを受けたが十才の時三絃に轉じ同年（卅三年十二月）因講に加入する。明治卅七年十二月同師の決意にて二代鶴澤寛次郎師の膝下に敎へを受け

る事になり翌卅八年一月より三代竹本越路太夫一座に加はり寛治郎師に隨行東京市を振出しに約一年七ケ月に渉り日本全國を巡業する。明治卅九年九月廿一日御靈文樂座に加入し大正八年九月興行より本澤に昇る。大正十二年十一月京都文樂座創立より七代竹本八十太夫（現在の六代竹本住太夫）の相三絃となり昭和十年九月興行にて別る。昭和十一年一月新義座組織されしより同座に加盟し全國を巡業、同十四年六月同座解散迄行を俱にして其後暫時休座す。同十六年一月興行より文樂座へ復歸し同年九月興行より三代伊達太夫の相三絃となり今日に到る

尙、初代野澤喜左衛門の名稱は、明治四十二年五月、三代勝市が攝津大掾より賜られたもので、次ぎの如き書簡が殘されてゐる。

「こたび改名の相談について愚考すれば、喜の字は野澤祖先の頭字なれば猥りにゆるさず門人にやう〳〵喜鳳の名有ても喜次郎喜三太は金賣兄弟に有喜六は落語の仕出しにつかわれまた喜右衛門は佐倉の目證しなり依て　野澤喜左衛門　なれば全く初代にて他にも憚らず行末は門人に繼續させ永久保存せられん事を望むになむ。（二見攝翁印）」

文樂座小史（昭和十七年調査）

○竹本座創立（現今ヨリ二百五十八年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）

○文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪ヘ來ル

○第一次稻荷社內時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社內時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橘時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社內時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

本朝廿四孝

十種香より狐火の段まで

十種香より狐火の段迄

娘八重垣姫	竹本織太夫
武田勝頼	竹本住太夫
腰元濡衣	竹本重太夫
白須賀六郎	竹本長尾太夫（豊竹伊勢太夫）
原小文治	竹富太夫（豊竹三瀧太夫）
長尾謙信	竹本春太夫
	鶴澤觀西翁
	〃 鶴澤寛治郎
	〃 鶴澤友衛門（野澤吉三郎）
	琴（野澤錦太郎）

明和三年正月（二四二六）竹本座初演。作者には近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出、竹田平七、竹本三郎兵衛等が名を列ね、全五段に分れ、殊に、第四の切「十種香の段」が名高い。所謂甲越の戰を題材とした大近松作「信州川中島合戰」（享保六年八月＝二三八一＝竹本座初演）に基き技巧を凝らしたもので、武田、上杉兩家の確執に足利將軍を殺した齋藤道三の謀判を取合せた作。

梗概

武田、上杉兩家は諏訪法性の兜の事から確執して居りましたが、將軍義晴の身に變事があつた爲三年間合戰を止めて其間に曲者を探す事、若しそれの出來ぬ時は兩家は互に一子勝頼、景勝の首を

人形役割

娘八重垣姫	桐竹紋十郎
武田勝頼	桐竹榮三郎
腰元濡衣	吉田龜松
長尾謙信	吉田玉市
白須賀六郎	吉田玉德
原小文治	桐竹紋太郎

打つて渡す事を誓ひ三年間は無爲に過ぎました。

此所に信玄の息勝頼ですが、彼は奸臣板倉兵部の爲に幼時より民間に育つて花作り箕作と呼ばれ瓜二つの兵部の子が勝頼と名乘つてゐました爲に幸に僞の勝頼が切腹し、其首が渡されたのでした然して此所長尾館に仕へる腰元で此の僞の勝頼と戀仲の濡衣は、將軍義晴を狙撃した齋藤道三の娘で、父の意をうけて武田上杉を亡さんとしてゐたのですが、戀人の死に會つて翻然、武田家の爲に上杉家から法性の兜を取り返そうと、腰元となつてゐるのでした。箕作の勝頼も亦曲者詮議と幼君の守護法性の兜取戻しの爲に、花造りとなつて此の館に入りこんでゐるのでした。又上杉家の息女八重垣姫は、かねて武田勝頼とは兩家和解の爲に許婚の仲で有りましたが、僞の勝頼の切腹を、一圖に眞の勝頼が切腹したものと思ひこみ、其繪姿に向つて、絶へ果てた緣を歎き悲しむのでした。

劇は此所から始ります。

姫のかうした様を見た勝頼の箕作は、そゞろ不愍の念に涙するのでしたが、濡衣は勝頼の姿が、我が亡き戀人と瓜二つの容姿に、思はず胸とゞろかせるのでした。そして似たとは愚か、矢張り其まゝと、其足下に泣き伏す聲に、姫も襖の隙から窺へば、正しく繪姿其まゝの人が其所に居て、濡衣と言葉交して居りますので、姫は改めて濡衣に向ひ、若し此箕作が其方の知る邊でも、又殿御でもないならば、戀の媒介をと頼むのでした。濡衣はそれが眞實の戀ならば、仲介せまいものでもないがと、誓紙の代りに、法性の兜を盗み出して貰ひたいと云ひます。姫は兜を望むとは、扨は眞の勝頼様に違ひないと、箕作に縋つて嬉し涙にくれますが、箕作は、いつかな本心を明かさないのでした。爲に姫は、勝頼様でもない者に云ひ寄つたは辱しと、其場に自害して果てやうとしますので、此所に始めて眞實は明されたのでしたが、折柄謙信が現はれ、箕作を使ひに出すのでした。是は疾

くより、箕作を勝頼と見貫いてゐたが爲で、其後より討手の勢を向けて討んとするのでした。そして濡衣をも引立てるのでしたが、一方姫は、手に入れた法性の兜に向ひ、勝頼の身安泰を一心に祈願するのでした。と怪しや忽ち狐火燃へ立ち、白狐の姿の池水に映ると見へましたが、諏訪明神の神體に等しき兜、八百八狐つきそつて守護する奇瑞に疑ひなしと覺るや、忝なや有難やと兜を捧げ爰や彼處に燃ゆる狐火に守られて、勝頼の許に急を告げに急ぐのでした。

床本抄

申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし様子を聞くよりも、嫁入する日を待兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂しみは、繪像の傍で、十種香の、煙も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ふし、流涕こがれ見え給ふ。

思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さよふけて、幾重もれくる爪音は、君をもうけの奥御殿、こなたは正體涙ながらアレ〳〵奥の間で檢校が、謡ふ唱歌も今身の上、おいとしいは勝頼様、かゝる巧みのあるぞとも、知らずはからぬ御身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても、歎いても、聞入れもなき胴慾人、娘不憐と思はすなら、命助けて添はせてたべと、身を打伏して歎きしが。

觀賞おぼえ

昭和十七年十一月　日

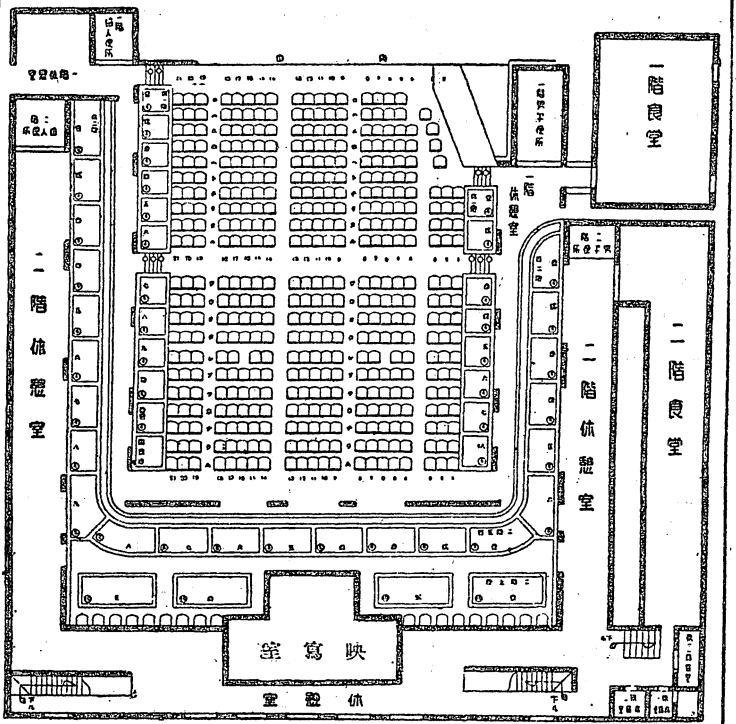
源平布引瀧

新作出陣

壺坂觀音靈驗記

本朝廿四孝

文樂座御席場御案内



御觀覽席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前賣切符。壹等席のお切符は五日前から發賣致します。また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ゐます。

切符賣場。右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

京阪神松竹系各座十一月のお知らせ

大阪 歌舞伎座

林又一郎襲名延長興行

正午と五時開演

晝夜二部興行

（一部觀劇料）
櫻席 一、八〇〇
菊席 一、〇四〇
三等席 一、〇〇〇
二等席 二、〇〇〇
一等席 三、五〇〇
（稅別）

大阪 中座

松竹家庭劇

毎日 正午。五時二回開演

好評！打越し驀進!!

（觀劇料）
四等席 五〇〇
三等席 七〇〇
二等席 一、〇〇〇
一等席 一、七〇〇
特等席 二、二〇〇
（稅別）

大阪 角座

厚生劇

關西歌舞伎大合同

晝 正午
夜 五時 二部開演

（觀劇料）
四等席 五〇〇
三等席 七〇〇
二等席 一、〇〇〇
一等席 二、〇〇〇
特等席 二、五〇〇
（稅別）

大阪 弁天座

金井修一座

平日。正午より二回開演
日曜・祭日・十時開演

（觀劇料）
平土間椅子席 六十九錢
一等席 一圓三十錢
（稅別）

大阪 浪花座

新興演藝特輯番組

毎日 正午開演
日曜・祭日・十時開演

（觀劇料）
階下席 九三
階上席 一、六八
（稅別）

大阪 あべし劇場

大阪中で一番安い

笑ひの劇場

毎日 正午開演
日曜・祭日・十時開演

（觀劇料）
階下席 五四
階上席 九三
（稅別）

神戸 松竹劇場

曾我廼家五郎劇（十一日まで）

毎夕四時半開演
日曜・祭日は
正午より晝間興行

（觀劇料）
四等席 五〇
三等席 一、〇〇
二等席 一、五〇
一等席 二、九〇
（稅別）

京都 南座

井上正夫合同劇

水谷八重子

藤村秀夫 特別加入

毎日四時開幕
日曜・祭日十一時半より晝間興行

（觀劇料）
五等席 五〇〇
四等席 一、〇〇〇
三等席 一、五〇〇
二等席 二、〇〇〇
一等席 三、五〇〇
（稅別）

大阪 大劇

五日より
灰田勝彦の實演
草笛美子

十二日より
松竹少女歌劇總出演
かぐや姫

一週 歌ふ理御殿
二週 おもかげの街
三週 女の手
四週 あなたは狙はれてゐる

同時封切映畫は

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆樣御承知の通り我大阪に於ける鄉土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でムゐます。

文樂座人形淨瑠璃は 曾に大阪の誇りとする鄉土藝術のみならず我日本に於ける古典鄉土藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。從つて開場毎にこの大使命が全う出來ますやう、皆樣の御期待に背かぬ樣、皆樣に御滿足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御すゑ付きの點は御客樣の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ゐます。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ゐます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ゐます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ゐます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお斷り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐます。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般從業員に不行屆の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆樣へ御案内◇

當座は此度皆樣へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第參上、どうぞ御利用下さいませ。

專用電話南㊻三七八八番

松竹株式會社
文樂座
支配人 下村清次郎

昭和十七年十月廿八日印刷　大阪市南區久左衛門町八番地　松竹株式會社大阪支店内　發行人 鳥江銕也
昭和十七年十一月一日發行　發行所 松竹株式會社大阪支店　大阪市西區土佐堀佐藤一丁目十二　印刷所 永井日英堂印刷所　一部 ㊥金二十錢